

## 日本製造業の次世代戦略 知られざる「第三の敗戦」の危機

山田太郎 著

著者は、幾つかの国際企業に勤務した後、独立してコンサルティング会社を設立。企業の業務改革やIT導入プロジェクトを指揮するなど、IT戦略と技術の両面に強く、大手企業の各種プロジェクトに参加している。

バブル崩壊による経済不況を著者は、「第二の敗戦」と名付け、バブル崩壊後、企業は体質改善を進めるとともに、世界的な自動車やデジタル家電の拡大、中国の経済的発展等によって、この第二の敗戦を克服し、いざなぎ景気が招来したと分析する。

しかしながら、この再びのバブル状態も実際のところは「楽観できる状況にはない」と警鐘を鳴らす。

体質改善の途上における景気回復によって、企業の改善改革の芽は全部棚上げとなってしまい、やがてやってくるであろう第二のバブル崩壊に耐えられない可能性がある」と述べる。(08年9月以降の経済状況を予測していたともいえる)

また、第2章「匠の危機」では、「匠がいなければ成り立たない日本の製造業の構造」や「ノウハウやスキルを人から人へ伝播させる構造」が確立されなかったのが問題なのだと指摘し、これからの製造業を担う40代30代の人たちのモチベーションをどう高めるかが、これからの最大の課題であるという。

第3、4、5章においては、日本の製造業の変遷を概観し、製造業のグローバル化が進む中においては、ITシステムと流通のネットワーク化が不可欠であり、日本はこのネットワークから置き去りにされつつあると指摘する。

また、製品の短命化に対応するため、アメリ

カなどにおいては、自動車などの部品の標準化モジュール化が進んでいるが、日本においては、この面においても、遅れを取っていると指摘し、日本の製造業は「第三の敗戦」を迎えつつあるという。

以上のような日本の製造業の現状分析と課題のうえにたつて、いくつかの解決策を提言する。

第6章において、「製造業の基本に立ち返るべき」と、著者は述べる。

製品の製造にあたっては、顧客の求めているスペックに応えることを第一に考え、スペックを細かく管理し、これまでのようなスペックの甘い製品を排すること。

また、製品の部品やユニット単位で仕様を組み替えて製品のQCD（品質・コスト・納期）をコントロールし、製品の戦略的自由度を維持していくこと。

さらに、これまでのような、図面管理による製品構成情報を部品表による情報管理に改め、製品の短命化に応えるとともに、多品種少量生産体制を可能とすること。

このような情報と物(部品)の一致によって製品の競争力の維持・強化が図れると著者はいう。

終章「日本を再生させよう」においては、ものづくりに特化した製造業ベンチャーの育成や、技術そのものを売買するシステムについて提言する。

また、これまでのような「匠の技術」や「企業が培ってきた技術」に頼っているだけでは、今起きている要素革命や技術革命、素材革命には、早晚対応できなくなると指摘し、これからは、新しいモノや技術に挑戦する創造性豊かな技術者が必要であり、彼らが組織を活性化させる原動力になっていくという。

生徒の「創造力の育成」の必要性を、改めて考えさせられた一冊である。

(東洋経済新報社、227頁、1680円) (梅田政勝)